

X-90

竹柴諺藏著作

演劇
脚本

嗚呼忠臣楠柯夢

全十册之内
第壹

088375-000-2

特52-583

嗚呼忠臣楠柯夢

竹柴 諺藏 / 著

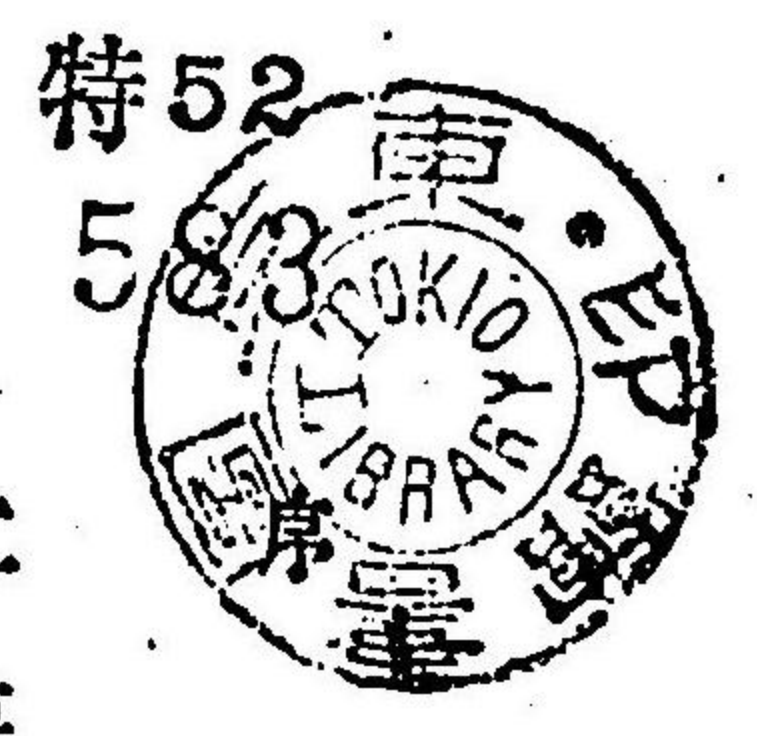
M22

DBJ-0001



演劇鳴呼忠臣補功

場割



幕

神泉苑造營の場

二幕目

鎌倉建長寺の場
同 山門の場

三幕目

薬師堂ヶ谷土牢の場

四幕目

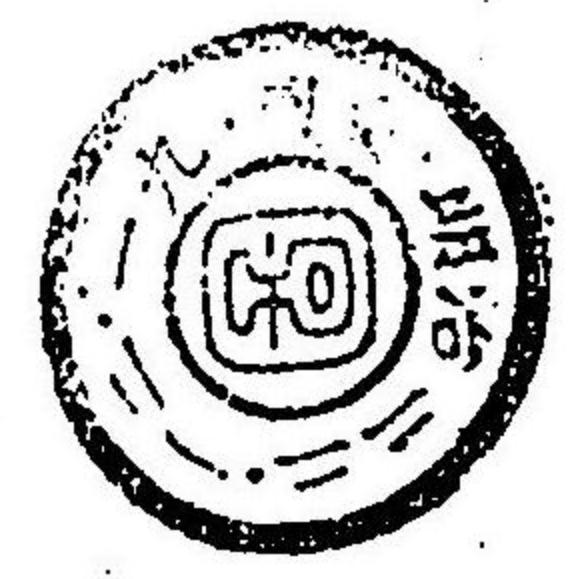
三條馬場殿の場
藤房卿遁世の場

五幕目

京都合戦の場

同 奥

梅津の里幸内住家の場



六幕目

杉本佐兵衛泣男の場
新田義貞出陣の場

七幕目

櫻井の宿訣別の場
和田岬遠矢の場
湊川討死の場
楠公碑前夢の場

八幕目

祇園社内繪馬堂の場
等持院門前の場
同位牌堂の場
三條河原木像梟首の場

六詰

青柳健之助浪宅の場
西川堤地蔵堂の場
梅津川ね勘腹切の場
衣棚浪士捕物の場
同裏手樋の口の場

大序

役人替名

楠河内判官正成

新田左兵衛督義貞

足利左馬頭直義

高ノ越後守師泰

坊門清忠

中ノ院定平

大館次郎宗氏

仕丁四人

雜掌壹人

脚本鳴呼忠臣橋平功大序

神泉苑造營の場

本舞臺三間の間高二重白木の階梯高欄付後とへさげて上下も三尺つゝの宮格子真中御簾を
 ねろし平舞臺上み下も櫻の立木此前紫の幕を張り空より櫻の釣枝都て神泉苑造營假御殿の
 体二重上手お坊門清忠下手に中の院定平冠装束笏を持ち公家の拵らへて扣へ居る平舞
 臺上手に新田義貞素袍入紋立烏帽子小手脚當の拵らへて住居此上手に大館次郎宗氏半素
 袍侍あばし小手脚當にて扣へ居る下手に足利直義素袍大紋立あばし小手脚當の拵らへて住
 居此下手に高の師泰半素袍侍烏帽子小手脚當にて扣へ居る上み下もに仕丁二人づゝ扣へ居
 る此見得下り葉にて幕明く」清忠「如何に方く」皆く「ハア、ト平伏する管絃に成り」
 清「逆臣相摸入道高時悪逆日々増長あし忝あくも主上後醍醐天皇を隠岐の國へ流し奉る
 といへども天是を宥さむ武臣等が軍功に依て高時一類悉く亡び天下復古の基いを開く事偏
 に武臣の忠功とは申ながら御聖運の徳に内る所主上神佛を捨てたまわさるゝ程其方等
 にも難有く心得猶も忠勤勉勵で宜らう」定平「如何も貴卿のたまふ如く高時暴威を振ら
 と雖ども西に圓心南に正成北に長年東には新田義貞義兵を起し朝敵を滅亡せし事全く義貞
 正成が武畧新田楯なくんを如何でる北條の大敵を滅亡し得んや兩人の軍忠感するも餘りあ

り「義貞」コハ難有き定平卿の仰せ臣卑賤しくを宮の令旨を頭上に戴て逆臣高時の大敵を滅亡せし事私家の面目此上のいべきや」直義「夫と申も家兄高氏又た拙者身命を抛擲御味方に参りし故御聖運も相開け殊に此度高時の殘黨相摸次郎の討手として高氏鎌倉へ責下り悉く討ち平らげしは莫大の武功然るに因て此度の御恩賞當家第一と決定められしは天然自然の作爲所る」ト是を聞き大館勃然としたる思入有て」大館「ア、否直義公れ扣へ被成れい餘の儀と免もあれ高時を滅亡せしと足利家の軍功とはナト聞憎き御一言相摸入道を滅亡せしと主君義貞の手柄コリヤ拙者が申さざとも萬人の知る所る夫を引かへ高氏公に起證文を敵に渡し帝都へ右視左顧逃登り圓心千種卿の手を借つて僅々六波羅を攻亡し手柄は足利一人と誇稱り顔なる只今のお詞殊に此般の恩賞も全く准後の御高庖口」師泰「ヤア可駄れ大館此般の御恩賞准後の御高庖口と何の隱言賞の大君の行ふ所る何私しを論せんや推察する所る新田殿も當家の武功を欽慕しく嫉まるゝと覺へたり」大「ヤア嫉むなどと奇怪至極兵法も辨知まへぬ臆病者の足利殿を何しに恨み嫉まんや無功の者に恩賞が過度故へ申のサ」師「ヤア無功とは何が無功有功はこそ足利家と一の軍功と決定められしと萬人の目をもつてする所る夫を蔑視す大館次郎今一言云て見よ舌の根切て切り下るぞ」大「ヤア臆病未練の汝等が未鍛刃鉄が此身お立らや」師「ヤア不謹言詞の雜言過言立哉否かイテ拙者が」大「

何と小瀝な」二人太刀の柄に手をかけ屹度あるを義貞直義兩人を制止め」義、直「ヤア卑陋なり扣へ居らぬの」師、大「トやと申て」義、直「ハテ扱扣へいと申さば扣へ居らぬか」師、大「ウム」ト兩人無念ながら扣へる義貞思入有て」義「イヤ何に直義殿臣下の無禮ハ幾重にも」直「何のく千里の羽を伸す大鵬の拙者蚊の睫毛に巢を作る虫同前の彼等が雜言耳喧騒い計にて何の心に掛け升らや○何は格別清忠卿へ申上奉る家兄高氏の武略に因て相摸次郎滅亡びし上の豫ての勅約將軍職宣下の綸旨家兄高氏へ下し置れい様偏願い奉る」清「其儀は大君にも勅約なれを磨より奏問いたす有ふ」定「アイヤ清忠殿先づれ扣へ被成れい將軍職宣下の勅約とく以外の儀高氏關東下向の砌り東八ヶ國の管領と願いに任せれ宥許あれども將軍職の儀と關東靜謐の忠に因るべしとの御諛夫を勅約なんぞハは心得難き直義の願い元弘の軍宣下の儀を押して願う足利の心底甚以て其意を得ず殊に世上の風説は相摸次郎兵火の中に自殺せしとは大さ詐り誠とは山林お身を隠し軍用金を掠取り追々味方を購聚るよし若し不然もせよ殘黨如きを滅亡せし些細お手柄お將軍職の綸旨を下し賜わらば相摸入道を滅亡せし新田の武功と何をもつて致さんや如何に高氏御高庖の貴卿あれども是等の儀はお心得も之有はず此儀計りは相成るまい」清「ア、イヤ定平殿コハ貴卿のお詞ども思へど義貞が武功と何が武功抑も元弘の乱れの初度高氏御味方お参りし故天下の士

本官軍に属し勝つ事を一時に決せしも偏に足利の武功といふもの高氏が逐つ返しつ廻つた跡へ拾い首して嚴め敷う宣下の論旨は願われまい夫とも義貞將軍職を御身と願う心成るか
 「義」コハ思ひも寄らぬ清忠卿の仰せ惡逆無道の相擲人道天の御罰を受たる自滅高氏の功にも非ず勿論新田の武畧も非ず偏に大君の御聖運の芽出度所る夫を功に論旨を望むと餘人は
 格別義貞にハ毛頭微塵もいわず「ト直義へ係けて云ふ」清「何様コリヤ然ら有べきはず假令義貞願へんとて何の差たる功無くして將軍職を允許そふや」大「イヤ主君ハ功なくを足利殿には猶功なし高氏殿へ將軍の任をお允許ある時は當家の耻辱此上なし萬一朝庭にては允許あるとも臣等の我輩いつかないのを成り申さぬ」師「ヤア又しても主君を蔑視なす其煩拵モウ了簡が」ト師泰立かゝる此時向ふまで「正成」アイヤ師泰先づ待れよ楠河内の判官正成逐一是にて見聞せり」四人「ヤ、彼聲ハ」清定「判官正成」ト是を大小入りの合方に成り向ふより正成素袍大紋の烏帽子に小手脚當の拵らへにて出て來り花道に留まる皆々見て「義、直「貴君と補正成殿」師、大「先づく是へ」正「然らむ御免下さり升う」ト同右の鳴物にて舞臺へ來り好き所へ住居思入あつて「今日ツた當神泉苑の御造營、落成に相成り疾にも伺公仕るべきの所ろ遅參の段は幾重にも御高免の下さり升う」師「シテ正成殿には何故あつて拙者を」正「お止め申の外ならず將軍の儀は武家の上職足利殿に限らず武士の身の志望所元弘の

軍忠は互に劣らぬ新田足利孰れを何と定め難き將軍の任職相摸次郎滅亡びしとは申しながら未だ存命いたすよし萬一是等の争論より両家確執も相成らば朝敵隙を覗う時等朝家の御大事を辨知へぬは不忠の第一凡俗の拙者如此な義を上申も忍入り以得共將軍職宣下の儀は此後大切ある方へ論旨を下し賜わらむ互お意恨も遣らぬ道理此儀上卿より御沙汰の程願こし奉存る」定「誠に正成の申條埋ま當れり貴卿ハ何と思召る」清「去れば武臣の者より差配いたすべき善はなければ智恵ハ慢の正成が詞聞捨に相成るまい宣下の儀は今一應朝議の上にて兎も角も」正「スリヤ愚臣が願ひお聞届け被下やうと云ハ、難有ら存じ奉る○イヤ何よ直義殿如此申し朝家のお爲を思ふが故へ必ず御心に觸られぬ」直「何の心に懸け升うや往古より將軍の任と代々源氏の儕輩が功に因て居す例假令只今お允許あくとも無間存意を」正「ヤ」直「イヤサ無間大君にも御允許の有べき時節を待てムろ」正「新田殿にも此場の儀と必ず意恨ハ挟まぬ様猶も朝廷守護の儀に懈怠なき様御忠勤を」義「其儀は仰せ迄もなく抑も味方に參りしぐり命ハ大君に捧呈し拙者假令如何様の御沙汰有るとも恨みを懷抱之我等ハ非ず只今の儀は臣下の卒忽不禮の段は御兩卿眞平御用捨の下さり升う」ト是をバタ／＼成り端懸りより半素袍の雜掌一人走り出て來り「雜掌」ハッ申上げ升る勅詔に據つて結城判官名和長年大塔の宮を召捕り奉り馬場殿へ押込め外候人の者ども三十餘人悉く搦捕

り六條河原へ引出し只今誅戮に行ひ升てムリ升るト言捨引返して這入る敵役三人顔見合せてこそ一外の皆々恟り思入有て」正「ヤ、合点の行かざる只今の訴旨何科あつて恐れ多くも宮を生擒に仕奉りしや」義「殊に大君へ盡忠の候人まで誅戮を加へしとは旁々以て心得ず」定「勅説の義と有る磨が不知はずなきお不時お起りし此場の注進清忠卿より御存ト成るや」清「不知で成るか大塔の宮おと帝位を奪へん御逆謀故」定「ヤ、スリヤ大塔の宮よは」定「義大」大「アノ御逆謀どな○ヤ……」ト顔見合せ恟り思入正成これしあつて」正「アイヤ清忠卿宮御逆謀の企てとは思ひ設ぬ御仰せ元弘以來必死を以て忠を盡されし大塔の宮御隠謀と共意を得ぞ」直「アイヤ正成殿とりや其許の御高庇口と申もの忝なくも勅命を蒙り宮を召捕る程の一大事卒爾な事を仕つろや」義「シテ又宮の御隠謀と申にこ」正「何ぞ確實を證據でも」直「證據と申て外でもムらぬ正成殿之を御披見被成れい」ト懐中より令旨を出して渡す正成開展さ見て」正「ヤ、コリヤ是宮より諸國の兵士を帝都へ召るゝ此令旨」直「何と正成殿御覽被成れーか今靜謐の御世あるに令旨を以て諸國の兵士を召さるゝは御隠謀ではムらぬか」師「其令旨よる當家の幕下大森彦七伊豫の國より持參なし天下の大事と火急の注進」清「殊に元弘の其砌り諸國の武士へ賜えりし令旨を繪旨の文章に認められしは疾くより王位を奪へん下心」直「大君にも逆隣遊をされ今日の儀に相成りしも」清「天の冥罰免れぬ所ろ」正「ス

リヤ其令旨故宮始め」定「天下の爲めに忠を盡せし」義「三十餘人の候人迄」大「皆を誅戮よ」立役四人「行なはれしとな」清「如何にも」正「ハ、ハア、情なき大君の御心餘人は知らず宮お於ては御隠謀の企てと遊むさるべき所以なし是等の儀より兵革の端と成るべき大事にムれば一應も再應も其實否を糺せし上罪の輕重を確定べきよ只御逆謀と計りにて忠臣三十餘人迄御誅戮と何事ぞや是と申を大君御智恵の御向眼准后の爲に陰蔽せ給ひ見す」識者の辨頭お「ト清忠と直義の顔を見る」清「直」直「ヤ」正「イヤサ見す」御逆謀が誠にせよ元弘の忠節を思召さる至此の御設置とあるまじさあ三十餘人の者共は死刑の上是非おけきと宮の儀は今一應大君へ歎願下さる様」義「偏に願望い」正「義、大」大「奉る」清「ヤア不能々々帝位を奪わんと計りし大塔の宮假令御親子あればとて罰を重く致さねば逆臣絶迹ひま有まじ」直「是と申を私しの計らい成ぬ大君の勅説」師「御貴殿達とて妨碍あるは」清「逆勅の罪は免除ぬぞよ」正「義」スリヤ如何様に申上ても」清「繪言汗の如くヒヤわい」ト屹度いふ」正「ハテ是非もあ死」ト義貞と顔を見合せ」義、正「有様じやナア」定「シテ又宮の御所置の儀は」清「則ち今日鎌倉へ流刑よせよとの大君の勅説」直「其預り人は此直義」大「スリヤ宮様よ直義公へ」義「アノお預けに成りしとナ」直「夫も如前大君の勅命」正「返すくゞ心得難き大君の御叙慮外に御預け人も有べきよ御中不和なる足利家へ」義「御預け有ば御身の上に」大「

凶事有んこそ是必定」定「ハテ歎息かわしき事共じやナア」此時刻の太鼓鳴る清忠思入のつて」清「今打つ太鼓と所念の刻限定平卿にて奉幣便の御役目片時も早く神前へ」定「何様左様仕ろう」正「宮の儀お就き定平卿へ申上くべき儀もムれば」義「拙者どもも神前へ供奉仕るで」立役三人「ムり升う」定「左様ムらば清忠卿」清「定平卿」正「先づね越し」皆々「有れ升う」ト是を下り葉成り仕丁沓を直す定平先に正成義貞大館次郎仕丁附添平舞臺上手へ這入る直義師泰後を見送り思入あつて」直「師」清「忠卿」清「ユリヤ」ト押へる是を管絃ふ成り」直「拙者が手段を以て宮に逆謀と讒言なし候人の者共迄誅戮いたせし上からと當家に於て一つの安堵」師「宮には兎角直義公御兄弟をば憎ませ給ひ此度諸國へ令旨を下し兵士を帝都へ召されしを實は當家を滅亡す手段」直「夫と申も我々兄弟反返の下心有との嫌疑拙者と固より家兄高氏にも宮に左様な御疑念を受くべからずとムらね共日頃不和成る間柄もへ萬一の儀も之れ有る時と又もや乱れの基と存じ令旨を以て御繼母たる准后へ讒言致せしも天下のお為めと存する故」師「又二ツには日頃から意恨に意恨を重ねし宮を百尾能く罪に落せしを全然貴卿の御計らい」清「何のく磨とても宮と日頃不和の中夫故准后へお勧め申内奏より讒口せしも宮を憎ませ給ふ上御高庇厚き足利の爲を思ふて准后の計らい」直「イヤモウ此度の儀お限らずとも忠賞の節當家をば一の武功と決定められ大國數多賜わりしも偏よ准后

のれ蔭故、師「猶此上の邪魔者は忠義顔する新田義貞是も不日讒言あして」清「彼者さへ滅亡す其時には豫て志望の將軍職は」直「第一若舎兄高氏へ綸旨の下るは是必定」師「其時こそは拙者が家兄師直には執權職」清「磨と准后に阿諛て官位昇進時内」直「先づ夫迄は清忠卿」師「宮を供奉なし鎌倉へ」清「早や發足を致して宜ろう」直「委細の密事と彼地々り」師「書面を以て伺ひ申さん」清「大事成就あす夫迄は」直「師」萬事は隠密」清「ユリヤ」ト清忠がんばい扇を開くと木の頭清忠向人へ耳語此見得宜敷時刻の太鼓あて○拍子幕

明治二十二年十二月四日印刷
明治二十二年十二月六日御届

定價金二錢

版權登錄

板權及行所有
板權與權所有

著作者
兼發行人

勝彦兵衛

大阪府東成郡西高津村
六百八十九番屋敷半民

大阪市南區長堀橋筋
二丁目八十番屋敷

印刷人 前野茂久次